

御家古今

御家古今

御家古今

御家古今

御家古今

目錄

御家法代

皇園親王御業道七首條

月信及武母并住持物

月法身素服法所業神

月法身下坂寺家与卷神

号道親王御業

目法門中蓮生寺御業

道名親王御業

号應准之后御業

目法門中河村刑部御業

目法門中林原左衛門守御業

号傳親王御業

二

目法門中島原小路法親王御業

号欽親王御業

目法門中本町法親王御業

号朝親王御業

目法門中法本坊式部卿御業

目法門中法寺金勝院御業

号統親王御業

目法身大橋長壽為師
目法身渡船古休為師
當青蓮院殿二品為親王御筆
目法身半野仲房為師
目法身河村源吉為師
目法身長安院兼師
世尊寺末葉伊波為師

青蓮院殿御系圖

伏見院皇子

尊圓親王

元祿後行宮大僧正十八世

祐助親王

後一條院皇子

尊道親王

後伏見院皇子

慈海大德

後芬榮利花院用白經道云

道安親王

後光嚴院皇子

義園准三后

鹿苑院大政大臣義滿公息

義收

早世 同

尊德准后

後福照院持開持基公息

尊傳親王

後法門院皇子

尊鉉親王

後柏原院皇子

尊朝親王

邦備親王沖子正親町院法王子

尊純親王

後陽成院法王子

尊隆親王

後水尾院皇子

高連院教一品号圓親王依

後光嚴院为兼道御習字被

依 敷法七ヶ條之為目

一兼と取極事

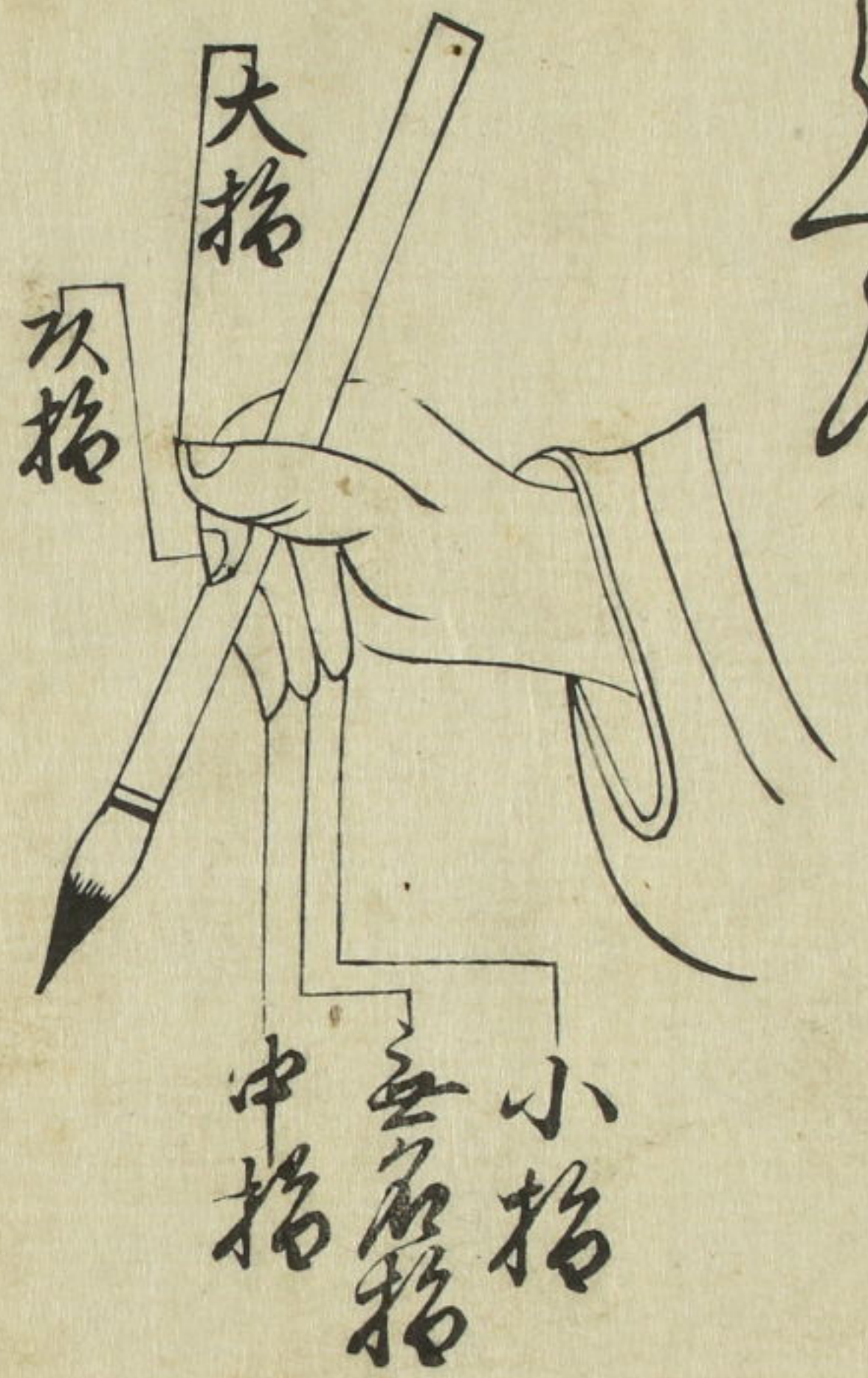
尊右のけりめより取らるる

わくともはけりぬるは

しゝの其取指ら中指のきけた
あま丹中央ふもくとたて以指
そくく大指はる指をて押してら
ま名指と小指と相つくとふま
しとひしとせと中指は下
ふとて中指のらしとふと
うらとらとらとらとらとらとら
大指はしとらとらとらとら
みとらとらとらとらとらとら
初とらとらとらとらとらとら
能とらとらとらとらとらとら
かとらとらとらとらとらとら

筆は右の如く握るべし

一



一 筆を右の如く握るべし

御本一巻と一度か首尾は留終る
あるはかきつゝ二首たは成るなり
教目清勢古くは御本は面類なり
清きふ浮て暗くは教目たは成るなり
やうふ成ては教目たは成るなり
首は留終るなり

一真の草字

先の字とて有法の字の
中庸の意也然と不略して
然と行ふ書ふるは行ふなり
然と畧して草の字は他と
行ふとははるは行の草也仍道

用と楷書右のなるは是行の
字と習字は後草とてまゝと
字也真の草は不道草又
ふも也とて一は然とて
是字の草は字もは續
書也

一 年々用捨事

三 賢者其業を以て初めの人
先達より是を不徒之て此本面白
物字習具て習字行て必其
換し是先賢の時業と下る
業位不同出業を以て年々習風

一 御業事
神と又初めの人と習字は
如

は年々習ふは能業を以て法年々
乃業と相違し一は習字初めは
いふのお趣は業を以て是凡業と
用事と料事と法と打紙と

卯乃之其の勢はく麻はをさく
檀根よりその根束はく及之須六
友之布あら木業也

一 浄土事

法華古より教代をさくお蓮
唐書南世界者也此枝葉の

曇いあく置はくくお曇は換
くは後物も也

一 法華古の時事

毎日一時二時たく法華古法
凡万機法は又法華古
此で彼國のくもくもをく條

白藤公に在りて宣旨に但請道徳
古之法意亦極勸力に切と入る
難成也一二年之先聊大なる
清内法に在り也

昔初公法極古に珍要大略の
此法習字に乃法に書きて其公

● 高親王侍臣波形

いはばにほへ
ちりぬるをわ
よたれうつねな

らむうぬのたぐ
やまげふこにて
あさきゆめみし
あじもせず

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
百
千
万
億

停泊半日暮色
重里想留越和賀
東望遠楚川祢似
羅其有井乃如也
屋海寧島大元傳
阿發哉極絕見新
清光堂城次

伊豆波の弘法大師の雲圓其意の
松の結新無量の文の結の
結つる世の世の徳の徳の徳の徳
傳の傳の傳の傳の傳の傳の傳の傳
授大の授大の授大の授大の授大の授大

明有之如右志

道平の如也

道平の如也

也と本記讀馬

擊人金波浦歌

の譜文載一馬也

書箱中持具

物名止先歌詩

名四五人作備

女之好也少却本

云法乃是為母

好也

為个先以法也

雁古一也

又上流也

あまのむすめ

あまのむすめ

あまのむすめ

あまのむすめ

あまのむすめ

あまのむすめ

佳招事

右之來書甚佳

畫月每清即

亦來福月

心自平文為記

之來時德識式

此乃吾家之樓也

樓欲擇舟也

舟者立於海也

定於板橋也

此乃吾家之樓也

此乃吾家之樓也

比一但方之厚古

教為是物變為

祠是方北おあ

意一可方之厚古

礼わあ一激中

在地下あ一激中

一池水也。少者。

悔意狀可厭也。

し
し
し

已刻 檀華殿

諸誠之毛堪嘆

有九兮當其歛

枯也仍偷采云

新回山草子好

於通照志之講和

亦作好子也三

采之相傳山志

金吾之能小鑽

之解腫子孝

部通日用之款

夜氏續傳中

苗仁死為少相

海之定被英頑

質是海之

乃自中

直心为田某

祖師禱一不苦者難

弟微無報始志也

臨此流毒難記

為國親王御書

素眼法師

蕭颯涼風

與表鬚

誰教計會

一時秋

秋
子
如
女
子
一
時
秋

秋
子
如
女
子
一
時
秋

秋
子
如
女
子
一
時
秋

秋
子
如
女
子
一
時
秋

心
誰
漢
糖
臨

誰
漢
有
覺

為國親王御印

下坂之書

如塊

如塊

如塊

如塊

半良家色

佳福花ふ

信

輝瀲瀲考

新動膚

水きくく花の

也見之如也

成

地之為也

之為也

後人

一曰道親王

三山子烟河

年智合浦縣

建意分珠

あまの原より

はるみまは

みづの

やぶ

かき

いづれも

高祖親王御事

蓮生堂御書

花下急帰園

毎糸指あ効

酔乞去風

二系道園親王

祝

四兼八挺頌后德

一山九院

醉神息

子庭淮三后

雜謂水以心

濃點陰步

波靈魚

誰謂花不語

輕漾激步

新動脣

我屋のうらみ

てふくまへ

あまじ

ほそ

あ

あ

高懸准三后沖甲

河村刑部政義

花光如錦
或濃

粧織志喜
風未

豊和

みくのや
人かへん

さくも
手はたて

かたはら
き森

高懸准三后御門身

林原重丸殿御

卯花の垣祢

の

し

あ

わ

わ

ま

か

月

の

二品名傳親王

製志漸後

子山君

曉 硯 初 詣

四海空

川流不息 みるはく

のぬくはく

のぬくはく

乃志

乃志

今川宗園

青

舊名

傳

岸色黄行古

樂室の波聲

こつれおもひしるゝ
月なるをいふは
はらふといふあはさ
るゝまらけり

是傳親清同弟

鳥居宗路強朋

ちりけりほそ

ゆきあか

あきらあか

あかしの里

二品子鎮親王

藤

多勢

梨竹

露

庭

燗中

茶

花

た

た

た

た

庭

庭

心

心

心

心

心

心

号鎮親王御書

本以孫光悅

不是乞花中偏

是筆过花開

後又無花

号鎮親王御書

河村源實公藏

官情窮思苦

清一表述也

秋之將述

おかし

まじり

みちを

たの

の

あ

あ

あ

あ

子親親玉泚

泚本坊武魁

清暖數聲

松下鶴

寒光一點

竹間煙

天邊一井

山閣秋深嵐氣竦
溪樓夜靜水聲近

子約親玉御

金勝院自書

あゝにわ

の

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝ

後筆秋書

あまのりくを海に

あはれをよみしは
法衣

よらきすむらさき

二品子純親玉

小斗星前横

松扇

南橋月下掛

宅子

かゝる心うけ静

たつたあひ月起りみ

まゝにぬれぬ

あゝ

あゝ

為純親玉御

大橋長

野寺尋花表

已送背教唯

有安之枝

寺々付る

寺々見舞也

寺々

寺々

寺々

大橋長後清也

不辯仙源

何處尋

三
ち
せ
了
な
ら

了
る
は
し
ら
ぬ

と

あ
ら
ま
ま
の
ま
ま

あ
ら
ま
ま
の
ま
ま

清通紙形

前大僧正慈法

我々の心

七乃法

心

六乃

心

道心

心

心

号證親玉清阿彌 平野仲房

香 潤 五 拜

寒 海 周

都山舟

晚

娘

や

霧の

い

な

心

心

心

心

心

心

心

心

心

以極其有樂之如樂
者年下以年上之得
賢心之之體體

二下下下下

黃南一本之之
為在雞之種傳下流
自洗之僅與款之益
算其也之許之也

西望可也

乃自以。南陽志

少度

英華第一本讀心

持飲山坑東籬之種

下流自誠以珍多子

為意矣乃飲之無光

後心也也

月御身

長安院有辨

色みくとうりふ

物くよの中乃

人念んぬたのた

ありまら

五十三

世々寺末葉伊波共初なる言

上破案内事

右改年々後留貴

可福幸甚之柳

陽春有之報之樂乞

時也詩酒之云極

後之無柳欲付

驢尾得之乞容取

望今乞之在如

相讓

秦城樓閣

鸞花裏

漢至山河

錦繡中

少海有

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ



A. D. 1711

The History of the City of London

By Wm. Stukely Esq.